

# 女子高生の大学受験意識と母親の大学 教育に対する期待観との関係 —文系と理系の比較—

○深瀬嘉子（山形女子短期大学）  
浅田隆夫（筑波大学）

キーワード：大学受験意識 大学選択の指標 教育内容

## 1. 研究の目的

現在、我が国の大学・短大への進学率は40%を越え、大学受験はごく一般的な社会現象となっている。しかし、大学・短大で何を学ぶかによってその後の長い社会生活が大きく左右される現状では、どのような大学・短大を選ぶかという点が、本人にとっては無論のこと、家族とりわけ親にとっても重大な関心事でもある。特に学部・学科の選択は、卒業後の進路（職業や社会生活）との結びつきが強くなるため、それまで漠然としていた人生設計をある程度意識化せざるを得なくなる。この意味で、大学受験は個人のライフスタイルを方向づけるための重大な節目であるといえよう。

本研究は、大学・短大に進学を希望している女子高生の受験意識とその母親の大学教育に対する考え方や期待観との関係を、文系と理系とに分けて比較考察するものである。

## 2. 分析資料・方法

生徒およびその母親に対する大学受験意識に関する2つの調査から得られた因子得点について、相関係数が有意となったもの（\*\*  $p < .01$  , \*  $p < .05$ ）を分析の対象とした（表1）。なお、親と子がともに回答した項目のみを集計したために、回答数（N）にはばらつきがある。

## 3. 結果と考察

1) 「教育一般についての考え方（親）」の因子得点と「大学選択の指標（生徒）」の因子得点との関係について（表2）

文系の場合、生徒の「雰囲気・イメージ」の因子と親の「国際性・その他」の因子との相関のみが有意に達した。親側の「国際性・その他」の因子には、国際感覚、実践的な外国語能力、研究能力を持った教師、大学の校風に関する内容が含まれているのに対し、生徒側の「雰囲気・イメージ」の因子には、学生生活、キャンパスの雰囲気、学風、自己の性格との類似性、人間関係などの内容が含まれている。前者は学生の能力向上に関した校風、後者は学生生活に関した校風ということが出来る。大学の「校風」のとらえ方は、個人の主観が入るので曖昧で漠然としているし、また親と子の「校風」に対するイメージも

表1. 分析資料（生徒に対する調査・母親に対する調査）

生徒に対する調査	母親に対する調査
7. 学部・学科決定の理由（45項目） 因子1～5	I. 大学教育一般に関する考え方（29項目）：因子1～5
8. 大学生活で重視したい内容（18項目） 因子1～3	II. 大学教育内容の方針について（15項目）：因子1～3
	V. その他（7項目）

内容的には異なっているものの、大学を選択する際に「校風」を重視するかどうかという点では、親子の間では共通の認識をもっているといえる。これに対して理系の場合、生徒の「雰囲気・イメージ」の因子と親の「主体性重視」の因子とは正の相関として、「専門性重視」の因子とは負の相関として有意になった。さらに生徒の「合格可能性重視」の因子と親の「主体性重視」の因子、「人間性重視」の因子とがそれぞれ有意に達していた。このことは第1に、大学選択の指標として「雰囲気・イメージ」を重視している生徒の場合、その親は大学教育に対して、学生に対する教育内容（専門性重視の因子）よりも学生自身の勉学や自己向上心といった「主体性」を育てる教育を強く望んでいるといえる。反対に、「雰囲気・イメージ」を重視しない生徒の場合は、その親は教えられる側（生徒）の主体性よりも教える側（大学）の教育（働きかけ）を重視しているといえよう。このように、受験生の大学生活（校風）に対する関心度によって、親は、大学教育での主体（積極的なかわり）を帰属させる方向（学生側または大学側）が異なっていたといえる。第2に、親側の子どもに対する精神的な成長（主体性や人間性）への期待度と、子の側の大学選択の際の合格可能性を考慮することとの間には、ある種の共通認識があったと解釈される。すなわち、大学に合格することそれ自体により高い価値をおく親は、入学後の教育（主体性の教育・人間性教育）には関心が薄くなっていくし、子どもの方も「合格可能性」を度外視してでも入学したい大学を選択するようになってくるといえる。一方、大学入学後の子どもの成長を期待する親の場合は、大学合格よりも入学後の大学生活の方が重要になってくるので、子どもの方は無理をせずに「合格可能性」の高い大学を選択するようになると思われる。この意味で、大学入学の前と後のいずれかを重視するかという点では、親と子との間に共通した価値観が存在しているといえよう。

2) 「教育一般についての考え方（親）」の因子得点と「重視する教育内容（生徒）」の因子得点との関係について（表3）

生徒の「能力を高める教育」の因子と親側の因子間の相関が有意になったのは、文系では「国際性・その他」、理系では「主体性重視」であった。同様に生徒の「生き方の教育」に関しては、前者では「専門性重視」（逆相関）、後者では「国際性・その他」であった。さらに理系では、生徒の「実用的な教育」と親の「人間性重視」の因子が有意になった。このことから、第1に、能力を高める大学教育に対する生徒の期待観は、文系の生徒の親

表2. 親の「教育一般についての考え方」の因子得点と生徒の大学選択の指標の因子得点との相関係数（文系/理系）

	雰囲気・イメージ	先生・教育制度	ステータス重視	知識・教養重視	合格可能性重視
主体性重視	.14 / .26**	-.15 / .04	-.04 / -.02	-.06 / -.05	.01 / .19*
人間性重視	-.17 / .14	.01 / .08	.13 / .02	.07 / .09	.17 / .22*
専門性重視	-.04 / -.19*	.12 / -.18	.05 / -.02	.00 / .00	-.02 / .07
国際性・その他	.24* / -.12	-.11 / -.02	.02 / .07	.04 / .05	.17 / .09

1) N=109/N=122

2) \*\* p<.01 \* P<.05

の場合は、外国語能力などに代表される国際性への期待感として具体的な能力と関連しているのに対し、理系の場合は自己の能力を出しきる主体性といったやや抽象的な期待感と結びつく傾向があった。第2に、親と子が大学に望む教育内容としては、文系の場合、基本的に同方向で相互に補強し合う関係であるのに対し、理系の場合は、異なる方向で相互に補完的であるといえる。すなわち文系では、生徒が望む幅広い教養を含めた「生き方に対する教育」は、ある意味で、親側の「専門性重視」とは対極にあるといえるからである。したがってこの2つの因子得点が逆相関であったことは、親子ともに大学に望む教育内容として共通の認識をしているといえる。一方理系の場合は、生徒の側が、「生き方に対する教育」を重視していれば、親の側では「国際性・その他」といった具体的な方向性や能力を重視し、生徒の側が「実用的な教育」といった実践的な教育を重視すれば、親側では「人間性重視」といったより理念的な教育を望む傾向がみられた。

3) 「教育内容の方針について(親)」の因子得点と「重視する教育内容(生徒)」の因子得点との関係について(表4)

文系では生徒の「専門的な教育」の因子と親の「実用性重視」の因子間で、理系では生徒の「生き方の教育」の因子と親の「制度改革重視」の因子間で有意に達した。この相違は、恐らく実践的・実用的な知識や技術の習得に対する基本的な認識の違いに由来するものと思われる。文系の親は、理系の親に比べて大学での教育内容に実用的な知識や技術が不足しているという認識を強くもっていると想定される。そのため生徒自身が専門的な教

表3. 親の「教育一般についての考え方」の因子得点と生徒の重視する教育内容の因子得点との相関係数(文系/理系)

	能力を高める教育	実用的な教育	生き方の教育	専門的な教育
主体性重視	.16 / .27**	-.06 / .06	-.03 / -.01	.02 / .04
人間性重視	-.15 / .05	.09 / .19*	.10 / .02	.08 / .08
専門性重視	.04 / .03	-.04 / -.10	-.19* / .07	.07 / -.07
国際性・その他	.27* / -.11	.15 / .10	.03 / .21*	.03 / -.08

1) N=113/N=109

2) \*\* p<.01 \* P<.05

表4. 親の「教育内容の方針について」の因子得点と生徒の重視する教育内容の因子得点との相関係数(文系/理系)

	能力を高める教育	実用的な教育	生き方の教育	専門的な教育
実用性重視	-.10 / .09	.06 / .12	-.02 / .15	.24** / .02
授業重視	.12 / .12	-.07 / -.13	-.15 / .03	-.10 / -.02
制度改革重視	.14 / .01	-.01 / .12	.09 / .20*	.02 / -.07

1) N=123/N=114

2) \*\* p<.01 \* P<.05

育に対する期待感が強いほど、その親は実用的で即戦力につながる教育を大学に求めやすくなる。これに対して理系の場合は、すでに大学教育で実用的な知識や技術を習得できるという前提があるために、特に「実用性重視」の教育を求める必要はなく、むしろ子どもが「生き方の教育」を重視するほど、子どもの自己実現を達成できるための条件として大学の自身の「制度改革」に対する努力を望むのではないだろうか。

4) 「その他の各項目(親)」と「大学選択の指標(生徒)」の因子得点との関係について(表5)

文系・理系ともに生徒の合格可能性の因子と親の「授業料・奨学金」の項目との相関が有意となった。生徒が合格可能性すなわち入学可能性の高い大学を選択しようとするれば、親の方としては子どもがめざす(入学を前提とした)大学での経済的負担が少ないことを願うのは当然のことと思われる。これに対して、生徒が合格可能性を余り考えずに、とにかく入学したい大学を受験の対象とするような場合は、親の方としては合格するなら経済的負担はいとわれないという心理が働いていると解釈される。なお、理系の場合、生徒の「知識・教養重視」の因子と親の「外国人教師の採用」の項目も有意となった。これは上記2)と同様に、親子間の大学教育に関する期待観が異なる方向で相互に補完的であることを示すものといえる。

#### 4. まとめ

大学教育に対する期待観は、文系と理系との親子間でいくつかの相違がみられた。第1に大学の校風に関するとらえ方、第2に大学教育の実用性に関する考え方、第3に大学教育の専門性に対する期待等について、文系の親子間では、双方の期待の方向が一致するのに対し、理系の親子の場合は、双方の方向が異なり相互に補完関係にある傾向がみられた。

表5. 親の「その他」の因子得点と生徒の大学選択の指標の因子得点との相関係数(文系/理系)

	雰囲気・イメージ	先生・教育制度	ステータス重視	知識・教養重視	合格可能性重視
授業料や奨学金を安く	.01 / .15	.04 / -.12	-.08 / .03	.16 / .09	.20* / .18*
大学入試制度の改革	.08 / .08	-.05 / -.11	-.12 / -.01	.08 / .10	-.00 / .07
社会人の教員の採用	-.06 / .13	-.00 / .05	-.13 / -.06	-.04 / .18*	.16 / -.09
入学は易しく卒業は難しく	.04 / .16	-.06 / -.01	-.02 / -.03	-.02 / .13	-.07 / -.00
社会に開かれた大学	.05 / .03	-.06 / -.02	.01 / .05	.01 / .05	-.00 / .15
大学教育に期待せず	.04 / .01	-.05 / .15	.06 / .02	.18 / -.05	-.02 / .08
外国人教師の採用	.05 / .06	.02 / -.05	.15 / .15	-.05 / .23**	.15 / .03

1) 「授業料を安く」 N=120/N=118 「大学入試制度の改革」 N=118/N=117 「社会人の教員の採用」 N=119/N=116 「入学は易しく卒業は難しく」 N=112/N=118  
「社会に開かれた大学」 N=119/N=117 「大学教育に期待せず」 N=112/N=113 「外国人教師の採用」 N=120/N=117

2) \*\* p<.01 \* P<.05